

ル, ACTH, CRH などは正常範囲内であった。アドステロールシンチ, MIBG シンチではともに集積亢進を呈した。手術標本は皮膜がやや厚めであった。病理学的検索では褐色細胞腫であったが、腫瘍内部には皮質細胞が島状に散在しており、また皮膜にも皮質細胞が豊富に認められた。アドステロールシンチで集積亢進を呈したのはこのことが原因と考えられた。

#### 25. $^{99m}$ Tc-MAG<sub>3</sub> plasma clearance (MPC) 法の精度向上の試み

渡邊 奈美 駒谷 昭夫 間中友季子  
山口 昂一 高橋 和栄 (山形大・放)

95症例で、MPC法とRussellらの方法による尿細管抽出率(TER)との相関を検討した。全体では $r=0.82$ ,  $p<0.0001$ と良好であったが、男性群と女性群では回帰式の傾きに差を認めた。回帰式の男女差は、MPC法の循環血漿量(PV)の算出法として用いている小川の式にあることを検証した。そこで、PVの算出にDissmannの式を代入したmodified MPC法を考案した。Russellらの方法との回帰式の男女差は減

少し、相関は $r=0.92$ ,  $p<0.0001$ と向上した。また、modified MPC法は、小児への適応が可能であると考えた。

#### 26. パスツール処理後の移植骨の骨シンチグラムによる変化

江原 茂 (岩手医大・放)  
西田 淳 白石 秀夫 (同・整形外)

骨軟部腫瘍の切除後再建において、病変部切除と加熱処理の病変部の自家骨を用いることは、同種骨利用のための組織が未成熟な現状では多く行われつつある。非侵襲的に骨への血流を評価できる骨シンチグラムはこのような移植骨の治癒過程の評価に有用であると考えられる。過去3年間において行われた11例の手術のうち、10例において骨シンチグラムが行われたので検討した。グラフトとの接合部への集積は術後1-2か月からみられ、徐々に減少する傾向にある。骨周囲から骨皮質への集積は、術後2か月以降からみられ、次第に骨内の集積としてみられるようになる。グラフトとの接合部の癒合が遅延すると、集積が持続する。症例を増やして検討していきたい。